

明治実業家列伝④

荒井泰治

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



狩野文庫の購入の功労者

今から百年前の大正元（一九一二年）年、七万冊に及ぶ書籍が、東北帝国大学附属図書館に運び込まれました。現在「狩野文庫」の名で知られる、国宝二点を含む日本有数の古典籍のコレクションです。

この狩野文庫が東北帝国大学の所蔵となるには、一人の実業家の尽力がありました。その実業家・荒井泰治が寄付した三万円で、大学は膨大かつ貴重な古典籍を購入したのです。大ざっぱに言って、当時の一円は今の五千円程度の価値があったようです。とすると、荒井が寄付した三万円は、現在の一億五千万円に相当するものです。これだけ多額の寄付を行い得た荒井泰治とは、どのような人物だったのでしょうか？

士族出身の若き銀行家

荒井泰治は、文久元（一八六一）年に仙台藩士の家に生まれました。維新後の明治十三（一八八〇）年に上京。中江兆民の下でフランス語や法律などを学んだ後、東京横浜毎日新聞社に入社。大阪新報社編集長を経て、明治十九年に日本銀行に入社しました。

当時の日本銀行は、仙台藩出身の富田鉄之助が副頭取の地位にあり、日常業務全般を取り仕切っていました。同郷の後輩である荒井泰治の才を認めた富田は、ヨーロッパの銀行制度を研究するために、フランス語にたけた

荒井を、近い将来にヨーロッパへ留学させることを含みに銀行家の道へ誘ったのです。

荒井はその期待に応え、業務の傍らで銀行制度の研究を進め、二年にして上下二冊の著作を出版しました。「銀行誌」と題されたこの書籍は、明治時代を代表する銀行論として知られることになりました。

こうして二十代半ばの若き銀行家として頭角を現し、もうすぐヨーロッパ留学も実現しようかという矢先、日銀の第二代総裁となっていた富田鉄之助が、大蔵大臣の松方正義と対立して日銀を去るという事態が発生しました。間もなく荒井も、富田の後を追って日銀を退社し、ヨーロッパ留学の夢は果たせないうままに終わってしまったのです。

全国有数の実業家へ

銀行家としては挫折した荒井ですが、この挫折は彼を実業家として大きな飛躍へと導くことになりました。日銀退社後間もなく、荒井は富田の紹介で鐘淵紡績（後のカネボウ）の支配人となり、その後東京商品取引所常務理事、富士紡績（現在の富士紡）支配人を歴任するなど、実業家として着実に実績を重ねていったのです。

その後、明治三十二年にフランス系商社であるサミュエル商会の台北支店長に抜擢されたのをきっかけに、荒井は台湾に進出します。当時台湾の民政長官は、やはり仙台藩出身の後藤新平でした。その後藤の信頼を得たこともあり、荒井は藤崎三郎助等と精糖会社を設立し、さ

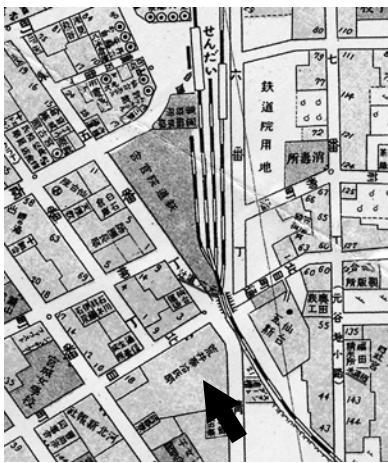
らに朝鮮や満州へ事業を拡大させ、台湾商工銀行頭取にも就任したのです。

こうして実業家としての地位を確立した荒井は、明治四十四年以降は貴族院議員に選出され、政界へも進出しました。

一方で荒井は、地元の経済振興にも目を向けました。仙北鉄道、仙台軌道などの鉄道経営を手がけたほか、現在の仙台市ガスの前身である仙台瓦斯株式会社や、長町に大きな綿織物の工場を建設した綿織物の旭紡織株式会社の設立にもかわりました。

このように実業家として大きな成功を収めた荒井は、六尺（二・八メートル）の長身に俊敏な顔立ちで、実際に会った人も、眼光が隼のようであったと回顧しています。

一方で、言葉が発すると、仙台弁丸出しで、まったく気取らない話しぶりだったとも伝えられています。海外にまで活躍の場を広げても、生まれ故郷の言葉をわすれない、彼の仙台に対する愛着をそこに見ることができのです。昭和二（一九二七）年三月三日没。六十七歳でした。



仙台の荒井泰治邸（矢印部分）は、現在のJR東日本仙台支社とJR仙台病院の敷地にまたがる広大な邸宅であった（大正元年『最新版仙臺市全図』）。



仙台軌道の通町駅（仙台市写真帖）。仙台軌道は大正11年に開業した仙台の通町を起点にする軽便鉄道で、後に中新田まで延伸された。荒井泰治はその設立発起人の一人であった。

仙台市史

好評発売中

通史編7 近代2

大正、昭和戦前期の仙台を1冊に凝縮

◆A5判 585頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館／櫛宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074